

ABOUT 益城4座

「益城4座」とは、益城町南部にそびえる4つの山々のこと。飯田山(431m)・船野山(308m)・朝来山(465m)・城山(480m)からなり、それぞれが個性的な山容と景観、そして奥深い歴史を秘めています。

これらの山々は、火山や活断層などの地球の活動によって形作られ、古くから信仰の対象として、また人々の暮らしの一部として大切にされてきました。

現在では、初心者でも挑戦しやすく、年間を通して気軽に楽しめる登山スポットとして注目を集めています。

4つの山々を巡りながら、益城町が紡いできた歴史と物語をじっくりと味わってみてください。



日本の近代化を支えた銅山

登る城山を



自然と都市が調和する町、益城町。市街地から南へ向かうと、のどかな田園風景の向こうに雄大な山々が姿を現します。

阿蘇の外輪山へと連なるこれらの山々は、まさに益城町の原風景。山がもたらす資源、清らかな水、そして澄んだ風は、古くからこの地の農業と人々の暮らしを豊かに育んできました。

この特集は、「益城4座」シリーズ第一弾として、かつて日本の近代化を支えた銅山である「城山」の魅力に迫ります。



日本の産業を支えた歴史 益城の銅山・城山

城山は、江戸時代から大正時代にかけて、銅山として栄えました。世界有数の銅産出国であった日本。江戸時代、銅は国の貿易を支える重要な輸出品でした。明治維新後は、日本の近代化をけん引する産業の一つとなり、鉱山が立地する地域に大きな発展をもたらしました。

しかし、それは光の面ばかりではありません。銅の採掘は、時に河川の汚染や鉱山病といった「鉱害」を引き起こし、経済的な利益の裏側で地域社会に重い課題を突きつけました。この光と影の歴史は、城山も例外ではありませんでした。

現在の城山には、鉱山時代の名残が色濃く刻まれています。採掘で生じた土砂を沈殿させた「沈殿地」、物資を運んだ「トロツコ道」、そして採掘に不可欠な電力を供給した「水力発電所」の跡地。これらは全て、往時の面影を伝える貴重な産業遺産です。

特に、坑道近くの山中には、採掘者たちが寝泊まりした場所や選鉱所の痕跡が確認できます。そこかしこに見られるのは、彼らが生活の土台とした石垣や、銅の製錬の過程で生まれたであろう残骸。

これらは単なる遺物ではありません。過酷な環境で日本の近代化を支えた人々の確かな息遣いを、私たちに伝えてくるのです。



山頂近くにある銅山の坑道入口

